



# ひらほく新聞

「ひらほく新聞」で検索！  
★ホームページ・ひらほくランド★  
http://www.hirahoku.com/  
☆バックナンバー含む「ひらほく新聞」を  
閲覧・ダウンロード可能です！

発行所 読売センター平塚北部 (ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807



タイトルを書かせていただきました。  
イベント前後、読売新聞・朝日新聞・  
東京新聞・タウンニュース他に詳細を  
紹介、報道していただきました。

障害は不幸ではない。障害があってもなくても、幸せはその人の心が決めるもの。楽しみながら分かり合える、そんな場をつくりたい。そんな思いから開催された二日間のイベント「あまごみフェス2018」(8月18日・19日、厚木市・複合商業施設「アミューあつぎ」)にスタッフとして参加。この春、イベントを企画しているという熱い思いを持つ実行委員長の小野純子さんとSNS上で知人の縁で出会い、後援のお願いなどを協力。ここでは、「一人も見捨てない教育体験」というタイトルで二日目の行われた内容についてお伝えします。

小野さんは、長男(7つ)が自閉症で、自身も注意欠陥多動性障害(ADHD)。昨年度まで同市立小学校で教諭として働いていた時は、ADHDに多い「忘れ物をする」「時間を守れない」症状で仕事に支障を来し、子育てと両方で悩んでいた。そして、自分がADHDであると職場で明らかすと、理解が得られ、以前と比べて楽になったという。

ライターネーム「雨野千晴」として、長男のことを発信、ブログも多くの読者を持つようになった。できないことを責めるのではなく、まずは自分自身を認め、工夫を考え、周囲の方に得意と不得意を伝えられるようになり、分かっていたことは、生き辛さの原因は、

何度も何度も。人と違っていいんだって。私も、ハル(長男)自閉っ子)も。そして本当は、普通という人は一人もいない。みんな違っていいんだ。違うからこそこの世界は輝きに満ちている。それが当たり前の世界になるかどうかは、世界を変えるんじゃない。世界を本当の自分に、自分がそう思えるか。ハルのことを。自分のことを。

## これから求められる教育とは？

まず、現在アクティブ・ラーニングやキャリア教育での教育研究の第一人者で多数書籍も出版されている上越教育大学教授、西川純先生の講演内容より。

小学校で学ぶもの、全部分からなくても、幸せに生きることはできる。

障害があつて事業所で働く場合にどういった能力が必要か。学校でどういった能力を得たらよいか。漢字を覚えるとか、計算ができるとかではない。その事業所の中で「人と関わる能力」が絶対的に必要。最も学んでほしいのは、「人の喜び悲しみに共感できる。人とつながることができる。人の力を借りられる」能力。

クラスには得手不得手のあるいろいろな子がいて、全

体達成が難しいとなつて、一人できなくていいよという子ができると、それが二人三人と増えていく。五人目はあなたかもしれない。それでは幸せになれない、そんなクラスでいいの。だから先生は、できるで

## 『学び合い』

授業者(深山智美教諭 義務教育でつける「生涯幸せに生きる力」について実践と研究を重ねている、長崎県公立小学校教諭。西川教授との共著も出版。)

全国から集まった多くの教職員の方々、親子連れ、一般異業種の方等、多彩な90名の方がワークに参加。模擬授業のワークシートには、「小学校特別支援学級の4年生の児童が将来の仕事についてどう考えたらいいか」という3つの質問。それぞれ、自分なりに考えて答えを記入。書き上がったら、シートを持って席を立ち、自分の書いたことを誰か3人に分かるように説明して、聞いてもらったサインをもらう。また、答えが分からなそうな困っている人を見つけたら、勇気を出してアドバイス。3人のサインがそろった人は、事前にホワイトボードに貼っておいた自分のネームのマグネットを裏返す。そして参加者全員の名前が裏返る「全員達成」を目指す。問題への解答よりも、どのようにして「全体達成」するかをみんなで取り組むことが最も重要。

小学生3名ほどとも同様なワークに挑戦。皆ごちゃま

それが『学び合い』です。

ぜでわいわいガヤガヤ楽しそうにあちこち動き回り、実際は、予定時間ギリギリに「全員達成」。

## 「一生涯を生き抜く力」を育む「一人も見捨てない教育」を学校のスタンダードに！

逆にならぬ企業側からの重視は、「社会性、マナー、挨拶、報連相、対人関係等のコミュニケーション力」。

先生は教えない。いくら立ち歩いてもいいというこの『学び合い』を既に実践されている先生方も多く、20年30年先の子どもたちの未来のために、教育を変えたいと熱心に関心を持っている方がこんなにもいる！そのエネルギーの総和は、とにかく衝撃的でした。

多くの人に知っていたきたく、できることで協力、発信を続けます。

多くの人に知っていたきたく、できることで協力、発信を続けます。

# 内発力

人間学を学ぶ月刊誌『致知』  
2018年9月号より

『プロフェッショナル100人の流儀』（弊社刊）という本がある。各界一流のプロの珠玉のような言葉が紹介されている。この百人に共通しているのは内発力の強さである。

例えば、人間国宝の講談師一龍齋貞水さんの言葉。「教えてくれなきゃできないって言うてる人間には、教えたってできない。そして、こうつけ加える。

「僕はたまに、貞水さんはあまり後輩にものを教えないね」と言われるけど、僕は教えるんじゃないやなくて伝える役。伝えるというものは、それを受け取ろう、自分の身に先人の技を刻み込もうとするから伝わっていく」

銀座の船屋「すきやばし次郎」の主人、小野二郎さんも言う。

「教えてもらったことは忘れる。自分が盗んだものは忘れない」

内発力のないところにいかなる成長もないことを、二人の先達の言葉は教えている。

侍ジャパンの監督を務めた小久保裕紀さんが、イチローについて忘れられない

思い出があると『毎日新聞』に書いていた。

小久保さんはプロ二年目に本塁打王を獲得。だが天狗になり、翌シーズンは散々。一方イチローは三年連続の首位打者へ邁進中。

《その年のオールスターゲーム、外野を二人でランニング中に彼に聞いた。「モチベーションが下がったことないの？」するとイチローは私の目を見つめながら「小久保さんは数字を残すために野球をやっているんですか？」と言った。

「僕は心の中に磨き上げた石がある。それを野球を通じて輝かしたい」。

自分はなんと恥ずかしい質問をしたのかと、顔が赤くなった。彼の一言で「野球を通じて人間力を磨く」というキーワードを得た。内発力で生きている人間の真骨頂をこのイチローの言葉に見る。

月刊愛読誌『致知』は今年で創刊40周年。記念して多くの著名人の方が言葉を贈られています。『致知』を20年以上心の糧にしてきたという、松岡修造氏のメッセージをご紹介します。

「僕と『致知』との出会いは1995年、ウィンブルドンベスト8に入った年だ。『致知』は僕に世界で戦うために必要な『精神』

を教えてくれた。そして今『致知』から学んだことを応援という形でたくさんの人達の心に響く言葉として、これからも伝え続けたい。」（おわり）



著者「信長」氏は、15年ぶつちぎりトップ、歌舞伎町伝説のNo.1ホスト。自分の筆文字師匠しもやんがこの春、新宿のクラブで対談収録をしていたのを聴き、書籍も三冊読みました。

信長氏は、共著もある齋藤一人さん（自分も10数年の一人さん信者です）との出会いで新たな生き方の美学を手に入れたという。『99%の努力はいらない』より一話をご紹介します。

## 「面倒くさがり」の性格を逆手に取る

もつといい仕事をしたいのにやる気が出ない。やることはたくさんあるのに、モチベーションを維持できないから効率が悪い。だんだん面倒くさくなってきたりして、やめてしまう。そんな悩みを持つ方はとても多い。実は、私もそれが悩みだった。

ホストの世界は、案外体力勝負のところがある。今は、スマホでSNSもあるので、多少はラクになったけれど、私がホストになった頃はガラケーが主流。その頃は本当に大変だった。当時送っていたお客様への営業メールは1日1000件。時間にして4〜5時間はかかる。そこで「これはゲームだ」と思ってた。

どんなゲームかというのと、「金シール集めゲーム」だ。幼い頃、幼稚園・小学校くらいでよくやる、「よかったです」の印として、先生にシールを貼ってもらった。あのゲームの要領だ。

1日1000件のメールを送信することができたならカレンダーに金のシールを貼っていく。皆さんは驚くかもしれないが、最初は嫌だと思っていたものが、1ヶ月という短期間で達成できたりしたのである。

だまされたと思ってぜひ一度、やってみていただきたい。不思議と「謎な達成感」が味わえることを実感していただけるはずだ。

人は、たとえ小さくても目標を達成することによって、脳が喜ぶ。そして、脳は、その喜びをまた味わいたくて、より行動を継続させるのだ。

何かをやった「自分への褒美」にお金を使ったり、

どこかへ行ったり、何かを食べたりしなくてもいいのだ。そもそも私は単調なものや、辛いことが苦手だ。だから、その性格を逆手に取って「どうすれば喜んでくれるか」というのをいつも考えるようにしている。

そうはいつてもという方が私がおすすすめしたいのが、最初に「これは楽しいことだ」と決めてしまつてやることだ。別に根拠なんてなくていい。「今から、楽しいことやるか」とわざと声に出してみたりして、自分に暗示をかけるようにして何か作業をやりはじめてみると、案外本当に楽しめたりする。「楽しい！」とまでいかななくても、多少やる気は出てくるものである。

効果は絶大だ。なぜなら人は、思ったことや口にしたことそのままの人間になるものだから。これは脳科学の分野でも証明されつつある真実である。

「どうしてもこれはやらな」といいたくないという、地味な作業や準備など、やる気になつてからやろう、などと思っていると、いつまでも先送りになってしまう。そのうち本当に時間がなくなつて、嫌な気分が焦りながらやると、さらに嫌々だからミスを連発したりしてしまう。そうならないようにするには、苦手なこと

も「おもしろい」ことだと決めて行動するのがいい。そうすると、やっていくうちに、だんだんハマつてくることがあるのだ。

このことに最初に気づいたのは大学受験のときだ。自分の学力がかなり低かったため勉強しなないと無理だと思いつつ、なかなかやる気が出てこない。

それでも、合格者がやっていた勉強法を真似して、とりあえずやる気はなくても机に座つて単語の暗記をやってみると、だんだんおもしろくなつて集中しはじめていったのだ。

あとになって、この現象が心理学者のクレペリンが提唱した「作業興奮」と呼ばれるものと知ったのだが、体が重いつきでも「とりあえず外に出よう」と決めて歩いていくうちに、だんだん気持ちも体も軽くなつてくるのと同じである。

そもそもやる気というのはあいまいなもので、上げてもすぐに下がったりする。常にやる気が上がり放しという方ならいいが、そんな方はそうそういないだろう。

だからこそ、やる気が出るまで待ったり、やる気を上げようと努力したりするのはなく「やったら楽しい」と決めて、とにかくやりはじめることをおすすめしたい。（おわり）

## 編集後記

酷暑に台風、想定外の自然の猛威、組織ぐるみの不正問題、凶悪犯罪等の報道が続くなか、この夏は次世代へも語り継ぎたい、二つの素晴らしい感動物語が広く全国を駆け巡つた。

一つ目は、山口県周防大島町で行方不明となつた2才の男児、藤本理稀ちゃんを発見し、「カリスマボランティア」として一躍、時の人となつた尾島春夫さん（78才）。小学5年で丁稚奉公に出された経験も今は宝だという。発せられるまさに人生の金言、教えの数々。尾島さんが特別なのは、誰よりも「被災者の気持ちに寄り添える」こと。神様が伝道師・尾島さんに成り代わり、理稀ちゃんに会わせてくれたのだろう。

二つ目は、県立高で甲子園準優勝、「主力校歌」「雑草魂」の金足農業。その金足農業のまさに立役者、吉田輝星投手。秋田県民のみならず、列島中が歓喜の渦に。全国からの支援・応援の寄付金の額は2億円近く。ドラフトの超巨玉となつた吉田投手から思わず出た「巨人行きたい」に、我らG党は大喜びだが、いよいよの未来の輝く星へ、怪我なく真っ直ぐに駆け上がつてほしい。心より、感動をありがとう！